

富士紀行（6） 須走復興の陰に義挙あり

宝永の噴火に際して、当時老中であった小田原領主大久保加賀守（忠増）は、被災地である駿河・相模の両国に救援米一万俵を送ったけれども、夫れだけでは被災地の飢えを救うには無理であった。一藩の力のみにてはとても叶わぬ事であった。そこで、幕府は翌年1月、武蔵・駿河・相模3国の内「所務なりがたき程の私領」は村の引き替えをすることにした。

即ちこれらの村々を一時的に公領と認める決定をして、関東郡代伊奈半左衛門忠順を派遣して、「当分、御領に相成り候間、支配致し、砂取りの儀、川浚え御普請の奉行あい勤べき旨」との命令を発すると共に、全国に石高100石につき2両ずつの上納を命じ（諸国高役金令）、48万両を徴収した。

内1811両が須走村に支給された。須走村の再出発である。須走村への幕府のお救いは他の村に比して手厚いものであった。それは、須走が、駿河と甲斐の国境に位置する交通の要衝で公用人馬の継ぎ立てを行っていたためであろう。笹坂峠を越えるルートは幕府諸役人の往来繁く、当時は宇治の茶壺も江戸への復路はこのルートを通った。

須走は斯様に幕府の積極的とも言える救援活動もあって、更には、幸いなことに余熱さめやらぬ翌宝永5年の夏には富士参詣者が殺到し、近隣中最も復興が早かったと思われる。

被災地を巡視した伊奈半左衛門はその余りもの窮状に驚き、「お救い夫食石代金」「砂除けお救い金」「種麦代の支給」或いは年貢の免除等の復旧施策を進めたが、眼前で農民が倒れていくのを見ながらも、手の施しようがない無力感を感じていた。

駿府紺屋町の代官所にあった幕府の非常米を配給されんことを願ったが、叶うはずもなかった。遂に彼は、公儀に無断で、貯蔵米1万3千石を運び出し、すぐさま貧窮の村々に配分した。この科で閉門謹慎ついで中追放となった。伊奈半左衛門は潔く割腹自殺をして果てた。時に正徳2年（1712）2月29日の事であった。新田次郎の小説「怒る富士」は、復旧のために一身を賭けた関東郡代伊奈半左衛門を主人公にしている。最も、彼の死についてはその結末が病死だったという説と切腹だったという説の2説が今も罷り通っている。

*参考

新田次郎氏は、昭和7年から12年までの5年間、富士山観測所（富士山測候所）で勤務したが、その体験に基づいて、直木賞受賞作でもある「強力伝」その他多数の小説をものにした。

伊奈半左衛門の威徳を偲び、後世にその事績を残さんとて、慶応3年に祠を小山町吉久保に建立し、更に明治11年には吉久保水神社と須走上真地に石祠を建てて、各地の農民がその恩恵を感謝する心を形にしたのであった。

そして、明治40年に至って、須走の王子ヶ池に伊奈神社が建立された。半左衛門の死から195年後のことである。昭和32年に至って、各地の石祠などを合祀して、須走下原に新しく伊奈神社が建立される。同63年に全面改築されて現在の偉観?表したのである。

被災地は挙げて田畑の復旧に取り組んだが容易に進捗せず、噴火から10年経た1716年（享保1）に復興の目途のついた駿東郡32ヵ村、石高6390石余のみが小田原藩領へ戻り地となった。足柄郡諸村は依然として幕領にとどまり、47年（延享4）、83年（天明3）の2次に

わたってようやく復領している。